

日本文学の一側面

—夏目漱石、芥川龍之介における漢文学の受容を中心として—

曲 維

(漢文学研究室)

第二次世界大戦後、比較文学は著しい発展を遂げた。近年来、特に比較研究の立場から日本文学を見る人がだんだん増えてきたようである。日本人のみでなく外国人も熱心にこういった研究に取り組んでいる。勿論、いままら比較文学の意義をくどくどと贅述するつもりはないが、日本に来てから数多くの先学の比較研究の論著を読んで、今まで理解できなかった幾つかの問題がだいぶ分かってきたような気がする。私個人の考えであるが、外国人にとって比較研究の方法で日本の文学を学習したり、紹介したりすることは、近道の一つであり、より良い効果が収められると思う。こうすると、ただ日本のことだけ考えるより、日本文学の特質が一層はつきりと分かり、それと同時に自分の国の文化の特質を再認識することも出来るのである。

外国との長い文化交流の中で、日本は主に二つの方向から影響を受けてきた。一つはアジア大陸の方向であり、もう一つは欧米の方向である。特に中国との文化交流の歴史が長くて、二千年近くあるので、日中両国は文学においても切り離せない関係を持っている。一部分の国語学者が漢語を外来語の中に入れていないのと同じように、多くの日本

人は中国の文化を異質の文化とは考えていないようである。日本人は「西洋」に対して「東洋」という言葉を使う場合は常に中国などの国のことをも含んでいる。(ついでに紹介するが、中国語の「東洋」の意味は日本のと違って、ただ日本のことだけを指す。)今まで中国との比較研究が欧米との比較研究より少なかったのは日本人のこの種の認識によるところが大きかったと思われる。しかし、中国文学——漢文学が日本文学の中で一席を占めているのは、比較文化論において、確かに珍しく且つ重要な現象である。

昔の日本の知識人にとって、漢文学はほとんど唯一の外国文学であった。それがゆえに、彼らは一所懸命にそれを取り入れて、真面目に学習した。万葉集、古今集、源氏物語、枕草子、方丈記、徒然草などの古典名作には、多かれ少なかれ漢文学の影響が見られる。漢文学の知識を自分の国の文学の発展に役立てるために、日本の文人はまたフアイトを燃やして漢詩文の創作をしたり、漢詩文を巧みに自分の作品に利用したりした。日本人の手によって書かれた漢詩漢文は、いわゆる「和製漢文学」である。日本人は中国文学のジャンルである漢詩漢

文を撰取し、それを完全に消化するために大変時間がかかったようである。天平勝宝三年（七五一年）に編集された、日本最古の漢詩集『懷風藻』には、模倣の詩作も一部分入っているので、従来の評価はあまり高いとは言えない。しかし、そこから当時の日本の知識人が漢文学に対する関心の高さと詩作のレベルが伺われるという意味において、大きな価値があると思われる。漢語という外国の言葉を使って自分の思想感情を表現し、漢詩文という「器」に自分の「心」を盛り込むためには、どれだけの努力と苦勞を必要としたのであろう。ここに特に記しておきたいのは、日本の知識人の漢詩文に対する執着心と創作欲は長い間衰えず、すくなくとも明治、大正時代まで続いていたと言えよう。

日本の近代文学を論じる時、人々は西洋との係わりに重点を置き、漢文学との関連を忽せに考えがちである。日本近代社会の特徴から考えると、この傾向はあまりひどく非難するわけにはいかないようである。周知の通り、明治維新を出発点とする日本の近代社会は、東洋的なものの否定から始まったと言ってもけつて過言ではない。欧米列強との距離を縮めるために明治政府は富国強兵、殖産興業、文明開化などの近代化政策を推し進めた。文明開化は一言で言えば西洋の文明を積極的に取り入れることである。西洋の物質文明が日本に雪崩れ込んできたのと同時に西洋の思想意識もどんどん日本に入ってきた。近代日本の文化は「東」と「西」の格闘の中で発展してきたのである。結局、一方がもう一方を消してしまうのではなくて、伝統的な東洋文化は新しい西洋文化と対立しながら、すこしずつ統一を求めたわけである。当時、いろんな分野で「和洋折衷」、「東西調和」が行われて、文学界にもまったく同じ状況が現れた。文学史を読むと分かるように、浪漫主義や自然主義などの西欧の文学思潮が我先に日本に入ってきた。

むしろ迎えられてきたと言った方がもっとふさわしいかも知れない。文学は社会的な産物であり、作家も社会的な存在である。時代が変るたびに文学界に新しい空気が吹き込まれ、作家が時代の変貌に応じて新しいものを書くのも当然なことであろう。この時代を生きてきた作家たちは、おそらく誰でも「東」と「西」をどういうふう位置づけたらよいかという難題に悩まされたことがあるであろう。土壌である伝統文化を完全に捨てることも出来ないし、栄養の一部分として西洋文化を導入しないと時代にふさわしい果実が結ばれないので、当時の知識人は「東」と「西」の知識を一身に備えなければならなかった。近代文学の大家がほとんど西洋の言葉や文学に精通するということから、日本近代文学の特質の一端が分かるであろう。『小説神髓』を書いて、従来の勸善懲惡という文学観を批判し、文学は文学自体で独立すべきであり、小説という形式が文学の中心となるべきだと主張した坪内逍遙は日本文学を近代に導いた人であり、東京大学の文学科に在学した時、英文学を専攻としていた。近代文学の先駆者とされる二葉亭四迷は東京外国語学校露語科在学中、ロシア文学に親んで文学への目が開かれた。医者よりも文学者としての業績が大きい森鷗外は明治十七年から明治二十一年までドイツで留学していた間、衛生学の研究をするかわら、西洋文学、芸術の勉強にも没頭した。森鷗外とともに日本近代文学の巨峰と呼ばれる夏目漱石は東京大学英文科の卒業生であり、明治三十四年から明治三十七年まで英国で留学して英文学の造詣を深めた。耽美派の代表作家として名を知られる永井荷風は五年間も欧米に外遊していた。外国の人道主義や新理想主義の影響を受けて自然主義や耽美派と違った理想主義的な文学を作った白樺派の作家の中にも英文学を専攻として学んだ人が少なくない。志賀直哉や長与善郎や里見弴は皆そうである。「大正文学の終末を、そして日本における近代の終焉

を象徴する」①のような自殺でこの世を去った芥川龍之介は大学時代の四年間を東京大学の英文科で過したのである。このような事例はまだまだたくさんあるが、確かに近代文学の代表的な作家たちは、ほとんど何らかの形で西洋と係わりを持っていった。もし以上のような学習や渡航の経験がないと彼らはおそらく近代作家になれないかも知れないし、今日の文学史に載っているような日本近代文学もありえないであろう。

時代の特色は往々にして同時代の文学の特色を決定することがある。「明治維新に始まる近代化のきわだった特色は、それが東西両異質文明の接触をともなった点にある。」②「西洋的なものと東洋的なものの融和とそこから新しいものの創造が、明治大正以後の小説家の課題である。」それがゆえに、今日、われわれは、「西」のことだけ頭裏において日本近代文学を考えると、偏った見解しか得られないであろう。

以下、明治期文学の代表作家夏目漱石と大正期文学の代表作家芥川龍之介に焦点を絞って、そして、東洋のこと、特に漢文学との関連を主として考えてみたいと思う。なぜ夏目漱石と芥川龍之介を考察の対象にしたかというと、二人は当時の文学の特色をよく表わしたからである。吉田精一が指摘したように、夏目漱石は典型的な、東西両洋という「二本足」的存在であり、「東洋と西洋とが、彼ほど渾然と深いところでミックスした例は稀であった。」③実はこの論点は芥川龍之介に対する評価として使用しても良さそうな気がする。三好行雄は、日本近代文学の「もっとも根源のモチーフ」となった東と西の問題は「芥川にとつても、低音部につねに潜在した固有のモチーフであった」④と述べた。東洋的なものを継承し、漢文学を受容するのにおいては、表面から見ると、二人には類似点がかなり多いようであるが、実は異なるところもだいぶあると思われる。

夏目漱石は一八六七年二月九日江戸に生まれて、一九一六年十二月九日生まれ故郷で逝去した。芥川龍之介は一八九二年三月一日東京に誕生して、一九二七年七月二十四日自ら若い命を絶つたのである。夏目漱石が生きた時代は主に明治と大正初期であり、芥川龍之介が生活したのは主に明治後半と大正時代であった。二人の間には二十五歳の月の隔りがある。それにもかかわらず、二人の古典との出会いはみな非常に早かつたのである。このことは、後に文学者に成長した二人にとつて測り知れない意義を持つていると思われる。

江戸草分の名主で通つた家に生まれた夏目漱石は、養子に行つたところも名主であつたためか、幼い頃から、古くて伝統的なものに関心を示し始めた。「思ひ出す事など」で、彼は次のように述べた。「子供のとき家に五六十幅の畫があつた。ある時は床の間の前で、ある時は蔵の中で、又ある時は虫干の折に、余は交るゝそれを見た。さうして懸物の前に蹲踞まつて、黙然と時を過すのを樂とした。こういう興味がのちほどの詩文の嗜好に發展したのである。

一方、芥川龍之介は、平民出身で明治十六年から京橋区入船町で牛乳搾取販売業耕牧舎を經營する新原敏三の長男として生まれたが、養子に入つた芥川家は十数代御数寄屋坊主として江戸城中に奉仕した家柄であつた。家庭においてどんな教育を受けたか、はつきり分らないが、遺稿『わが家の古玩』に書かれたことから、当時の芥川龍之介はずでに古いものに関心を持つていたと推測できよう。「蓬平作墨蘭図一幀、司馬江漢作秋果図一幀、仙崖作鐘鬼図一幀、愛石の柳陰呼渡図一幀、巢兆、樗良、蜀山、素檠、乙二等の自詠を書せるもの各一幀高泉、慧林、天祐等の書各一幀、——わが家の藏幅はこの数幀のみなり。」夏目漱石と芥川龍之介の思ひ出話しに最初に登場したのはたまたま、いずれも家に所藏した画であつた。これはまたく偶然のことかも

知れないが、家庭環境や直観的な対象が人間の趣味形成にいかにか重要であるかということをよく物語っている。

年譜を見ると、夏目漱石と芥川龍之介は思いのほか早く古典の教育を受けていた。二人の教養の基礎は主に東洋的な伝統文化によって築かれたものであった。

夏目漱石を論じる場合は、次の文章がよく引用される。「余児時誦唐宋数千言喜作為文章或極意彫琢句而始成或咄嗟衝口而發自覺澹然有樸氣竊謂古作者豈難臻哉遂有意于以文立身……」(『木屑録』一)(余、児たりし時、唐宋の数千言を誦し、喜んで文章を作爲る。或は意を極めて彫琢し、句を経て始めて成る。或は咄嗟に口を衝いて発し、自ら澹然として樸氣有るを覚ゆ。窃に謂う「古の作者、豈難り難からんや」と。遂に文を以て身を立てるに意あり……)⑤「余は少時好んで漢籍を学びたり。之を学ぶ事短かきにも関らず、文学は斯くの如き者なりとの定義を漠然と冥々裏に左国史漢より得たり。ひそかに思ふに英文学も亦かくの如きものなるべし、斯の如きものならば生涯を挙げて之を学ぶも、あながちに悔ゆることなかるべしと。余が単身流行せざる英文学科に入りたるは、全く此幼稚にして単純なる理由に支配せられたるなり。」(『文学論』序)そして、『落第』の中で、「元来僕は漢学が好で随分興味有つて漢籍は沢山読んだもの」と語つた。以上の文章からすくなくとも次のようなことが伺われる。すなわち、夏目漱石が幼少の時に啓蒙の知識として学んだものは西洋的なものではなく、主に東洋的なものであった。また、日本の古典よりも彼は中国の典籍が好きになうであり、「唐宋数千言」「左国史漢」など、文史を問わず、広い範囲にわたつて漢文学の知識を吸収したのである。漢文学の学習は、夏目漱石が「文を以つて身を立てる」のを志望した直接な原因であり、彼が後で英文学を専攻にしたのもこれと関係があるのである。

夏目漱石は明治三十八年(一九〇五)三十八歳の時、『ホトトギス』に出世作『吾輩は猫である』を発表して文名を高めたのであるが、彼が作家になろうと決心したのはデビューほど遅くはなかつた。「十五六歳の頃は、漢書や小説などを讀んで、文學というものを面白く感じ、自分もやつて見ようという氣がした」(『処女作追懐談』と、夏目漱石は当時の自分の心境を語つた。実は彼の志望はまわりの人に反対され、文学は職業にはならないと叱責されたさうである。⑥)

夏目漱石は趣味として本をたくさん読んだばかりでなく、本格的且つ正統な漢学の教育をも受けた。彼が「二松学舎に在籍した正確な時期は必ずしも明白ではないのだが、すくなくとも、明治十四年の四月頃から十五年の三月頃まで二松学舎に学んだことは確実である」⑦。二松学舎に入る前に、市谷学校での同窓島裕友輔の父親である画家島裕崎醉山が開いた漢学塾に通つていたとも言われているが、本当に漢文学の素養を身につけたのはやはり二松学舎の時期だったようである。佐古純一郎の調べたところによると、夏目漱石が在学した時の講義の内容は次の通りである。

- 三級第三課 日本外史、日本政記、十八史略、国史略、小学。
 - 三級第二課 靖献遺言、蒙求、文章軌範。
 - 三級第一課 唐詩選、皇朝史略、古文真宝、復文。
 - 二級第三課 孟子、史記、文章軌範、三体詩、論語。
 - 二級第二課 論語、唐宋八家文、前後漢書。
 - 二級第一課 春秋左氏伝、孝経、大学。
 - 一級第三課 朝非子、国語、戦国策、中庸、莊子。
 - 一級第二課 詩経、孫子、文選、莊子、書経、近思録、荀子。
 - 一級第一課 周易、礼記、老子、墨子、明律、令義解。
- 当時の二松学舎でこれだけの分量の難しい科目を設けたことには、

誠に感心してやまない。夏目漱石が三級第一課に入學したと推測されている。ここで、彼は漢文学の基礎知識を体系的に学習し、実際の習作もたくさんしたのである。「作詩文が必修科目であり、毎月三回、それも五日と十五日と二十五日に決められて、文一題と詩二題以上が出題されていた。」⑧もし、この時期のような厳しい文章作法の指導を受けなかったら、夏目漱石は人口に膾炙するような漢文や漢詩が書けなかったであろう。

ところで、芥川龍之介も早く古典に接触したが、夏目漱石のような本格的な漢文学の教育は受けなかった。資料によつてはたしよ時間^のずれがあるが、芥川龍之介はだいたい明治三十一年あるいは三十二年頃、一家の一中節の師匠宇治紫山の一人息子大野勘一に英語、漢文、習字を習いに相生町に通い始めたという。英語は『ナショナル・リーダー』であり、漢文のテキストとして頼山陽の『日本外史』を使用した。ここで改めて注目する必要があるのは、芥川龍之介が啓蒙教育の段階から東西のものを同時に習ったことである。この事実は個人の好みの違いよりも、二十五年もの時代の差異を物語っていると思われる。芥川龍之介は頭が良くして読解能力も強かつたろう。彼はかなり小さい時から自発的に本をたくさん読んだ。家にあつた『釈迦八相倭文庫』、『童謡妙々車』などの草双紙類や近くの本屋の翻訳書なども貪るように読んだという。その中で、本当に古典と言えるようなものはやはり中国文学作品の翻案と和訳本であつた。芥川龍之介は後で『愛讀書の印象』の中で、「子供の時の愛讀書は『西遊記』が第一である。これ等は今日でも僕の愛讀書である。比喩談としてこれほどの傑作は、西洋には一つもないであらうと思ふ。名高いバンヤンの『天路歷程』なども到底この『西遊記』の敵ではない。それから『水滸傳』も愛讀書の一つである。これも今以て愛讀してゐる。一時は『水滸傳』の中

の一百八人の豪傑の名前を悉く暗記してゐたことがある。その時分でも押川春浪氏の冒険小説や何かよりもこの『水滸傳』だの『西遊記』だのといふ方が遙に僕に面白かつた」と述べた。言葉は多くはないが芥川龍之介の漢文学への傾倒ぶりがじゅうぶん表わされている。彼のこのような気持は青年になつた後も変らなかつた。大正二年（一九一三）七月二十二日に藤岡蔵之への手紙の中で、「唯本は少しよんだよんだと云ふ中には古ぼけた虞初新誌や剪燈新話や五才子書（水滸傳のこと）や金瓶梅のやうな小説が多い横文字の本は殆よまなかつた」と書いた。

考えてみると、夏目漱石も芥川龍之介も若い時の読書の趣味はほとんど東洋的なものに、特に漢文学に集中していても言えよう。二人は後でみな英文科に入つたのであるが、彼らは自分の意志によつてこの進路を決めたというよりも、大きな力を持った時勢にそうさせられたのである。やはり『木屑集』からの引用であるが、「……未能果志。而時勢一變、余扶蟹行書上郷校。」（……末だ志を果すこと能はず。而して時勢一變し、余蟹行の書を挾んで郷校に上れり。『漢籍許り讀んで文明開花の世に漢學者になつた處が仕方なし』、『落第』と嘆いた夏目漱石は、運に恵まれなかつたことで相当悔やんでいたであろう。夏目漱石と芥川龍之介は二人とも漢文学に親しみを感じていた。しかし、両者の愛読した書籍の内容はだいぶ違ふようである。一方は春秋左氏伝、国語、史記、漢書などのような列国征戦、政權推移の史実と歴史人物群像を描いた史書類である。これに対して、一方は西遊記、水滸傳、虞初新誌、剪燈新話、金瓶梅などのような、まったく虚構によつて書かれた文芸書である。昔から、中国では史書を重視し、フィクションの文芸書を軽視する傾向があつた。娯楽本意とされる志怪伝奇などの小説はとて正統の学域に入れなかつたのである。好色文学

の最たるものとして知られた金瓶梅は露骨な性欲描写のために幾度も発禁になったことがある。剪燈新話も風俗に害がありとして一四四二年に禁燬の厄に遭ったという。先にあげた二松学舎の教科内容から、明治時代の日本の漢学教育は本場の漢学教育の伝統を受け継いでいたことが明白である。勿論、夏目漱石が言った「左国史漢」は具体的な作品名よりも、中国文学全体の代名詞として使われていたかも知れない。「唐宋千言」も漢詩全体を指していると理解した方がよいであろう。夏目漱石はきつと数多くの中国古典文学作品を読破したに相違ないが、芥川の青、少年時代に読んでいたような小説で「立身」しようとしたとはちよつと考えられない。

いったい、漢文学の何が夏目漱石と芥川龍之介を魅了したか、これは一言、二言では解答できない問題であるが、二人の後年の文章と談話に答案が求められる。大正九年（一九二〇）一月一日に、芥川龍之介は雑誌『文章倶楽部』に『漢文漢詩の面白味』という短かい文章を発表した。これは「漢詩漢文を読んで利益があるかどうか」という雑誌の記者の質問に答えて書かれたものである。「漢詩漢文を読んで利益があるかどうか？私は利益があると思ふ。我々の使つてゐる日本語は、たとひ佛蘭西語の拉句語に於ける関係はなくとも、可成支那語の恩を受けてゐる。これは何も我々が漢字を使つてゐるからと云ふばかりじゃない。漢字が羅馬字になつた所が、遠い過去から積んで来た支那語流のエクスペレクションは、やつぱり日本語の中に残つてゐる。だから漢詩漢文を読むと云ふ事は、過去の日本文学を鑑賞する上にも利益があるだらうし、現在の日本文学を創造する上にも利益があるだらうと思ふ。」文字と表現の視点から、芥川龍之介は鑑賞においても、創作においても利益があるというかなり肯定的な評価を出した。これはおそらく芥川龍之介自身の実感であろう。「漢文漢詩は一様にみん

な極大雑把な枯淡の文字のように思はれてゐる。しかし實際は大雑把どころか、頗る細な神経の働いてゐる作品も少くない。」「それから抒情詩的な感情は、漢詩に縁が薄いやうに思はれてゐるが、これ亦必しもさうではない」と、芥川龍之介は高青邱、韓偓、孫子瀟、趙甌北、杜甫の詩を例にあげて、漢詩の良さを説明した。結論として「決して一概に輕蔑して然るべきものぢやない。」「我々の當に学ぶ可き事が思ひの外多くはないかと思ふ」と指摘した。芥川龍之介の言葉の中には、当時の西洋崇拜の世態と「西」に偏つた文壇に対する不満も含まれていたと言えないことではないであろう。

夏目漱石は断片ではあるが、何度も漢詩文の魅力を語つたことがある。「長々しく敘景の筆を弄したもののよりも、漢語や俳句などで、一寸一句にその中心点をつまんで書いたものに、多大の聯想をふくんだ、韻致の多いものがある。」（『自然を寫す文章』）「自分は和文のやうな柔かいだら／＼したものは嫌ひで、漢文のやうな強い力のある、即ち雄勁なものが好きだ。」（『余が文章に裨益せし書籍』）夏目漱石は漢文学の簡潔で余韻のある言葉と雄勁な文体が大変気に入つたやうである。しかし、彼の好きなのはただ形式上のものだけではなく、もつと漢文学の内容を受つてゐたであろう。吉田精一が指摘したように、夏目漱石の場合の「東洋」は「主として中国を意味する。自国の伝統的詩文や思想の影響は、俳句をつくつてゐるにもかかわらず案外深くない。『方丈記』の英訳などを試みてはいるが、美術を除く国文学古典については輕視していた。『万葉集』や『源氏物語』を通読していかも疑わしい。」^⑨

漢文学は夏目漱石の文学観に大きな影響を与えたと思う。前に引用したように、彼は「文学は斯くの如き者なりとの定義を漠然と冥々裏に左国史漢より得たり。」そして英文学も漢文学と同じものではないか

と考えて、「生涯を挙げて之を学ぶも、あながちに悔ゆることなかるべし」と決心したのである。昔ながら中国人は、文章が「経世済民」のものでなければならぬという考えを持っていた。『史記』の作者司馬遷もこの種の文学観の代表人物の一人である。彼は『報任少卿書』の中で自分のこのよう主張をはっきりと述べた。古代中国人の文学観は平安時代にすでに日本に伝わってきた。日本の最初の勅撰の漢詩集巻首の小野岑守の序に、魏文帝の『典論・論文』から、文章「経国之大業、不朽之盛事。年寿有時而尽、榮樂止乎其身」という言葉が引用されている。『吾輩は猫である』や『坊っちゃん』などの初期の作品にある文明批評の精神と、死ぬまで「則天去私」を追求する態度から見ると、夏目漱石の文学観は「経国済民」そのものではないが、それに近いような気がする。『木屑録』の表紙に、夏目漱石は「漱石頑夫」^⑩という筆名を使った。「漱石」二字は中国の『晋書・孫楚伝』の「所以枕流欲洗其耳、所以漱石欲砺其齒」から取ったものである。頑夫二字は、彼の性格をよく表わしている。『木屑録』の一番最後のところに、夏目漱石は漢詩を一首記した。

自嘲書木屑録後

白眼甘期與世疎 白眼甘んじて期す世と疎なるを
 狂愚亦懶買嘉譽 狂愚亦嘉譽を買うに懶し
 為譏時輩背時勢 時輩を譏らんが為に時勢に背き
 欲罵古人對古書 古人を罵らんと欲して古書に對す
 才似老駘驚且駭 才は老駘に似て驚にして且つ駭
 識如秋蛻薄兼虛 識は秋蛻の如く薄にして虚を兼ね
 唯羸一片烟霞癖 唯だ一片烟霞の癖を羸し
 品水評山臥草廬 水を品し山を評して草廬に臥す
 明治二十二年（一八八九）九月、紀行漢詩文集を書いた時、夏目漱

石はまだわずか二十二歳であった。しかし、この「與世疎」「背時勢」という俗世に對する叛逆精神と、「草廬」「烟霞」に對する愛着を終生忘却しなかった彼は立派な行動で自己の信条を守りぬいた。彼が明治四〇年（一九〇九）三月帝國大学に辞表を出して朝日新聞に入社する決意をしたことや明治四十四年（一九一一）二月文部省からの文学博士号授与を辞退したことなどは、もう誰でも知っている佳話になつているのであろう。

日本近代作家の中で、夏目漱石の漢詩文はもつとも優れていると思う。彼の小説は不思議な生命力があつて、今日でも数えきれない愛読者を有している。しかし、彼の漢詩は彼の小説ほど広く知られていない。彼の漢文ときたら、知っている人はもつと少ない。これは大変残念なことである。夏目漱石は生前どれだけ漢詩文を書いたかはつきり分からないが、現在残っているのは二百七首の漢詩と五篇の漢文である。（『正成論』は純粹な漢文ではなく、仮名交じりの漢文体作文である。漢文の中に入れてもよからう。）現存の最初漢詩は『鴻臺』という七言絶句である。

鴻臺冒曉訪禪扉 ^⑪ 鴻台曉を冒して禪扉を訪う

弧磬沈沈斷續微 弧磬沈沈斷續して微かなり
 一叩一推人不答 一叩一推人不答
 驚鴉撩亂掠門飛 驚鴉撩亂門を掠めて飛ぶ
 「推敲」という故事を踏まえて、早朝禪寺を訪れる時の静かな情景を描いた詩である。習作の詩なので、これといった意境はないが、作者の名前を読まないと、日本人の作とはとても考えられない。竹内実の言葉を借りて言うと、「和臭」がない。夏目漱石の漢詩の代表作は、やはり『明暗』時代の詩から選ばなければならぬ。『明暗』を書くかたわら、漱石は詩作にも相当の力を入れて、七十五首もの七言律詩

を書いた。彼は久米正雄、芥川龍之介宛の手紙に、「僕は不相變『明暗』を午前中書いてゐます。」「夫でも毎日百回近くもあんな事を書いてゐると大いに俗了された心持になりますので三四日前から午後の日課として漢詩を作ります。日に一つ位です。さうして七言律です。中々出来ません。厭になればすぐ已めるのだからいくつ出来るか分りません」と書いた。後年に芥川龍之介は夏目漱石のことを思い出して、次のように書いた。「最も仕事に熱中されたのは『行人』の時と『明暗』の時で、朝の九時頃から午後の六時頃までぶっ通し書かれたことも珍らしくなかった。しかしそれは例外で、午後は仕事をきり上げて詩作に耽けられた。詩と言っても新体詩ではなく漢詩です。漢詩と言ふ奴は（——私などさっぱりわかりませんが）韻など、いふ六ヶ敷い約束事があつて仲々面倒臭く、漱石先生もよ程その詩作が苦しかったと見、うん／＼唸つて、七言絶句や五絶を一つか二つものしたものですがその詩作最中の先生と来たら逆もよりつき難いむづかし顔をしてゐたものです。」「夏目漱石の詩作の態度がよく表わされている文章なので、少し長く引用した。詩作は夏目漱石にとつて、けつして道楽ではない。彼は精神俗化を防止する日課として詩を作つた。読者の要望に応じて書いた小説と違って、漱石の漢詩はほとんど自分や親友のために書いたのである。それがゆゑに、日記のように、自分の内面世界のものをもっとも多く漢詩の中に凝縮されている。『明暗』と平行して書かれた漢詩は、『明暗』を理解するためのカギになっている。

次の詩は漱石の人生の最後の漢詩であり、大正五年（一九一六）十一月二十日の作である。

無題

真蹤寂寞杳難尋 ⑫真蹤寂寞杳として尋ね難し

欲抱虚懷步古今 虚懷を抱いて古今を歩まんと欲す
碧水碧山何有我 碧水碧山何ぞ我有らん
蓋天蓋地是無心 蓋天蓋地是れ無心
依稀暮色月離草 依稀たる暮色月草を離れ
錯落秋聲風在林 錯落たる秋声風林に在り
眼耳雙忘身亦失 眼耳双つながら忘れて身亦失し
空中獨唱白雲吟 空中に独り唱う白雲の吟
人間は自分の死をとても予知することができないが、尾聯の二句は漱石自身の死を予告しているかのようなのである。「則天去私」のイメージもはつきり感じられる詩である。

夏目漱石の漢詩は明治漢詩壇のトップレベルに達しているし、彼の漢文も明治時代の代表的なものである。『正成論』は明治十一年（一八七八）二月、友人との回覧雑誌に発表されたものであり、『観菊花偶記』は明治十八年（一八八五）の作であり、『七艸集評』、『居移気説』、『木屑録』はいずれも明治二十二年（一八八九）の作である。一年間に三つの漢文を創作したのは子規との知り合いと大きな関係がある。子規が自作の『七艸集』を友人に回覧して批評を求めたのに応えて、漱石は漢文で『七艸集評』を書いたのである。当時、漱石は自分の漢文に相当自信があつたようである。その年の九月に、漱石も自分の紀行漢詩文集『木屑集』を子規に見せて批評をもらつた。子規は漱石の文才に大変驚いて、「先天之性」、「千萬年一人」というような言葉を使って漱石を褒めた。確かに子規が賛賞したように、漱石の漢文はみごとなものである。『観菊花偶記』もなかなかの秀作である。客が菊の人工によつて造られた形を非難すると、「花を養う者」は話題を巧妙に転じて、士人の節操と道義のことを論じた。

……士則不然利祿不誘而有自由其性者焉爵位不餌而有自屈其天者焉

不甚哉哉夫士者世之所矜式而尊敬者也而今如此何獨怪於此技（士に至れば、則ち然らず。利禄は誘わずして、自ら其の性を曲げる者有り。爵位は餌せずして、自ら其の天を屈する者有り。甚だしからずや。哉。め夫れ士は世の矜式して尊敬する所の者なり。而して今、此の如し。何ぞ独り此の技を怪しまんや。）⑬

利欲のために「曲其性」屈其天の士人の醜態に対する辛辣な批判は、まったく漱石ならではのものである。私欲を憎む彼の気持はこの世を去るまで一向変わらなかったようである。『観菊花偶記』を読んで、すぐ想起したのは中国の明代の劉基が書いた『誠意伯集・賣橘者言』である。相手の人から、橘の質が悪いという文句を聞いて、売手はすぐ反駁した。「覩其坐高堂、騎大馬、醉醞醴而飮肥鮮者、孰不巍巍乎可畏、赫赫乎可象。又何往而不金玉其外、敗絮其中也哉！」ここで、劉基は、立派な恰好をつけているが心が腐った士人、官吏を手厳しく批判したわけである。『観菊花偶記』と『誠意伯集・賣橘者言』は文章展開の方式と主題が非常に似ている。これはまったの偶然な一致であるが、漱石の漢文はいかに漢文らしい漢文であることを物語っている。

芥川龍之介は大正四年（一九一五）十二月初旬、級友林原耕三の紹介で、夏目漱石を尋ねました。それ以後、漱石がなくなるまで、一年間ぐらゐ漱石に師事していた。芥川龍之介にとつて、夏目漱石は文学の育て親である。彼は漱石の励ましと称賛を受けながら文壇に邁進してきたのである。自然主義的な文学に同調しない点においては、二人は一致しているが、芥川龍之介の作品に漱石文学の影響があまり見られないのが事実なようである。漢文学の受容の方式においても、二人はだいたい異つていと言え。芥川龍之介も漢詩を書き、褒められたこともあるが、量においても、質においても、とても漱石には及ばないと思う。大正四年（一九一五）八月二十三日付、井川恭宛の書簡に

四首の詩が記されている。次の「波根村路」がその中の一つである。

倦馬貧村路 倦馬貧村の路

冷煙七八家 冷煙七八家

伶僂孤客意 伶僂孤客の意

愁見木綿花 愁いて見る木綿の花

これは芥川龍之介が作った数少ない漢詩の中で、とても良いものだと思う。中国元代の劇作家馬致遠の作品とされる『越調・天浄沙・秋思』の詩境に匹敵することが出来る。

枯藤老樹昏鴉 枯藤老樹昏れがたの鴉

小橋流水人家 小橋流水に人家あり

古道西風瘦馬 古道西風に瘦せし馬

夕陽西下 夕陽は西に下ち

斷腸人在天涯 斷腸の人天涯に在り

異郷の地にいる旅人の愁いを描いたこの作は数百年來、かなり高い評価を受けている。清末民国初年の文人王国維（一八七七一—一九二七）は「寥寥數語、深得唐人絕句妙境」（わずかな言葉で唐代詩人の絶句の妙境を描いた）と最大級の賛辞を使った。馬致遠が動詞を使用せずに、幾つかの名詞だけで、寒村の夕方の寂しい風景を描写したところは、後人に手本とされている。芥川龍之介が馬致遠の詩を真似たと断定するつもりはないが、「倦馬貧村路 冷煙七八家」というところは馬致遠の詩境と相当似ている。漢詩は芥川龍之介にとつて、余技にすぎないが、大正作家にしては、彼の漢詩は高く評価されるべきである。芥川龍之介は漱石と違つて、ほとんど漢文を書かなかつたらしい。当時、おそらくそんなものを書いて読む人はいなかつたであろう。芥川龍之介における漢文学受容の大きな特徴は、やはり中国の古典から素材を取って作品を書くところにあると思われる。

芥川龍之介は百篇あまりの短篇小説を残した。その中で、十分の一ぐらいのものは、中国の古典から材料を取るか、中国を舞台にして書かれたのである。中国古典に材を得たものは次の通りである。

○酒虫 大正五年六月『新思潮』『聊齋志異』卷十四「酒虫」

○仙人 大正五年八月『新思潮』

○黄梁夢 大正六年十月 發表誌不詳 沈既濟『枕中記』

(○英雄の器 大正六年十一月? 『人文』)

『通俗漢楚軍談』卷十二

○首が落ちは話 大正七年一月『新潮』

『聊齋志異』卷三「諸城某甲」

○杜子春 大正九年七月『赤い鳥』 鄭還古「杜子春伝」

○仙人 大正十一年四月『サンデー毎日』『聊齋志異』卷一

「勞山道士」

右のうち(一)内に入れたものは、直接中国古典からとったものでなくその日本語版を使ったものである。^⑭

芥川龍之介はよく「鬼才作家」と呼ばれるが、これは彼の凡非な才能と作品に漂う非人世的な雰囲気によるところが大きいと思う。彼のこの作風には『聊齋志異』、『剪燈新話』などの中国志怪伝奇小説の影響もあるような気がする。付け加えて言うと、芥川龍之介の中国の古典から素材を得た小説を読むと、彼は江戸時代の翻案小説から啓発を受けたのではないかとも思われる。しかし、芥川龍之介の作品は、ただの模倣ではなくて、更に高い段階での再創作としか言えないであらう。

漢文学の受容において、夏目漱石と芥川龍之介には、類似点もあるが相違点の方がずっと多いようである。これは個人差よりも時代の差と言った方が適当かも知れない。今後、日本の近現代作家における漢文

学受容の問題と「和製漢文学」の研究がますます重要視されるに違いないと確信している。

(本論文は、昭和六十二年度科研費による成果の一部である。)

注釈

- ① 奥野健男『日本文学史・近代から現代へ』中央公論社
- ② 三好行雄『芥川龍之介論』筑摩書房
- ③ 吉田精一『漱石における東洋と西洋』
- ④ 佐古純一郎『漱石詩集全釈』二松学舎大学東洋研究所
- ⑤ 『鑑賞日本現代文学五・夏目漱石』角川書店
- ⑥ 『鑑賞日本現代文学五・夏目漱石』角川書店
- ⑦ 佐古純一郎『講座夏目漱石』漱石の漢詩文』有斐閣
- ⑧ 齋藤順二『夏目漱石漢詩考』教育出版センター
- ⑨ 子規の『七艸集』を読んで、その評に初めて「漱石」と署名した。
- ⑩ 山敷和男『芥川龍之介と古典』『一冊の講座芥川龍之介』有精堂
- ⑪
- ⑫
- ⑬
- ⑭